

地域振興策としての観光事業の現状と可能性

徳島県三好郡西部地区の各町村の取り組み

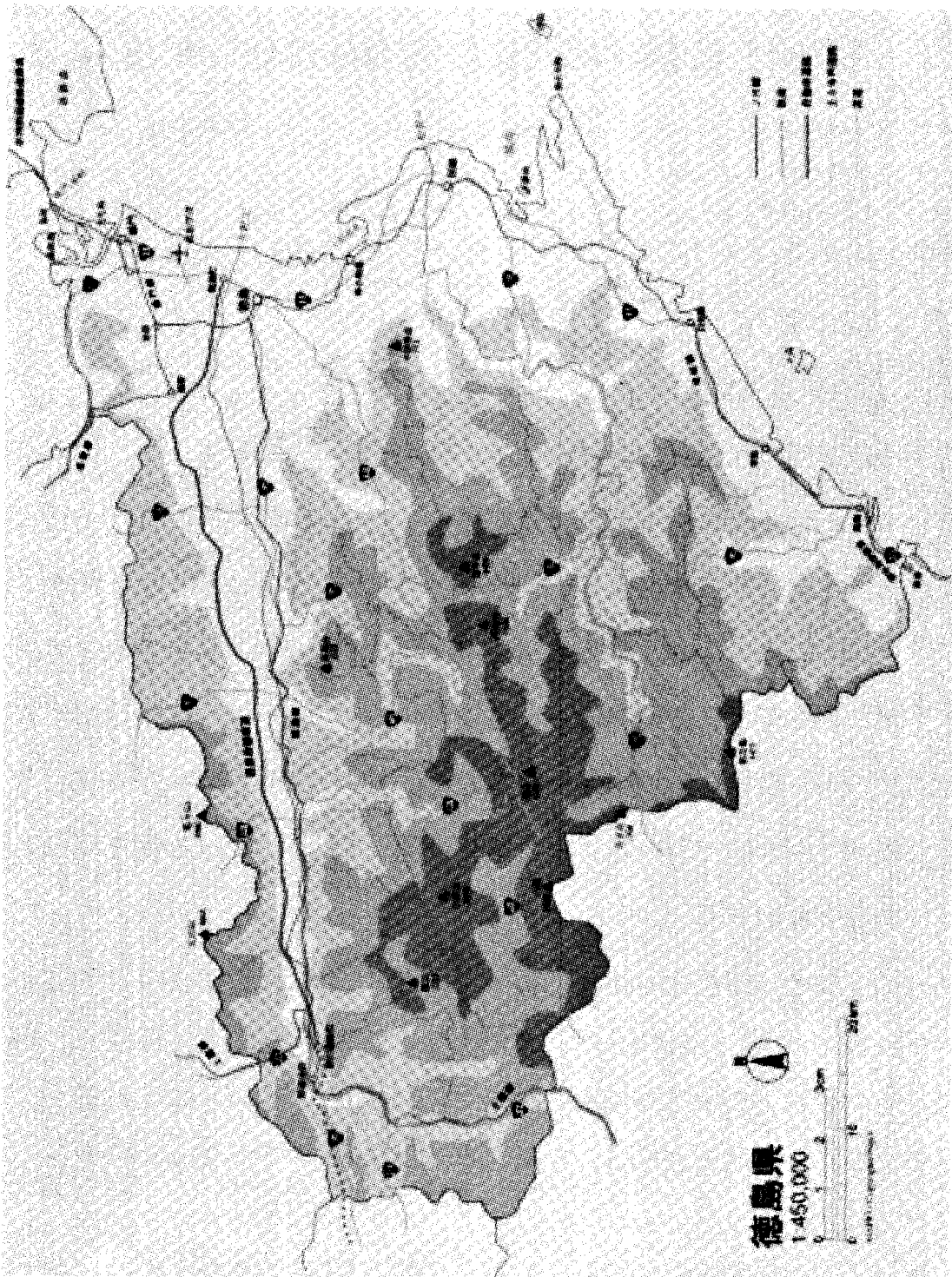
鍋 島 正次郎

1. はじめに

J R土讃線の多度津方面からの列車が阿波池田駅に近づくと、町を取り囲む小高い山々の稜線近くまで家が建っている光景が突如現れる。そして、阿波池田の駅前を出発し、国道32号線に沿って山城町の小歩危、大歩危を過ぎ、そこから主要地方道山城一東祖谷山線に入り、西祖谷山村のかずら橋を経て、東祖谷山村の名頃という集落まで向かう路線バスの車窓からも、同様に山の中腹や山頂近く、植林された杉木立の中に萱葺き屋根をトタン板で巻いた民家の集落が見え隠れしている様を見ることが出来る（地図1）。

無論、この地で生活する人々にとって、このような風景は当たり前のもので、日々の生活の基盤そのものであり、このような集落形態は、極端に平地の少ない山がちな地形と、かつては度々氾濫に見舞われていた谷底の地に人々が家を建てるのを避けたことの結果にすぎないのかもしれない。

しかし、この地を初めて訪れる旅行者が頼る主要な情報源は、市販のガイドブックや旅行会社のパンフレット、また最近ではインターネット上の各種HPなどであり、それらから発信される情報は、この地域の特異



地図1. 徳島県全図 (一般図)

な自然景観と独特の歴史的経緯を強調し、特に東・西祖谷山村については、平家の落人伝説の残る秘境という面を強く打ち出している。実際、この地域の自然資源や歴史遺産は、一部の自然愛好家や歴史ファンを惹き付けてきた。そこでは、アクセスの難しさこそが一種の観光資源である。そのため、政府が打ち出した何次にも亘る過疎対策関連法を受けて、各市町村でさかんに行われた公共事業の結果、道路の大半が舗装され、この地域の玄関口であるJR阿波池田駅から東祖谷山村役場のある京上までは車で1時間半の距離であり、かつてのような「陸の孤島」のイメージは過去のものとなってはいるが、路線バスの本数の少なさや、舗装されているとはいえ、山陰から突如対向車が現れ、運転者の肝を冷やさせる曲折の多いまだ一車線の地方道、観光地に付き物の娯楽施設の不在など、一般の旅行者が気軽に訪れることのできない「秘境」であり続けている。

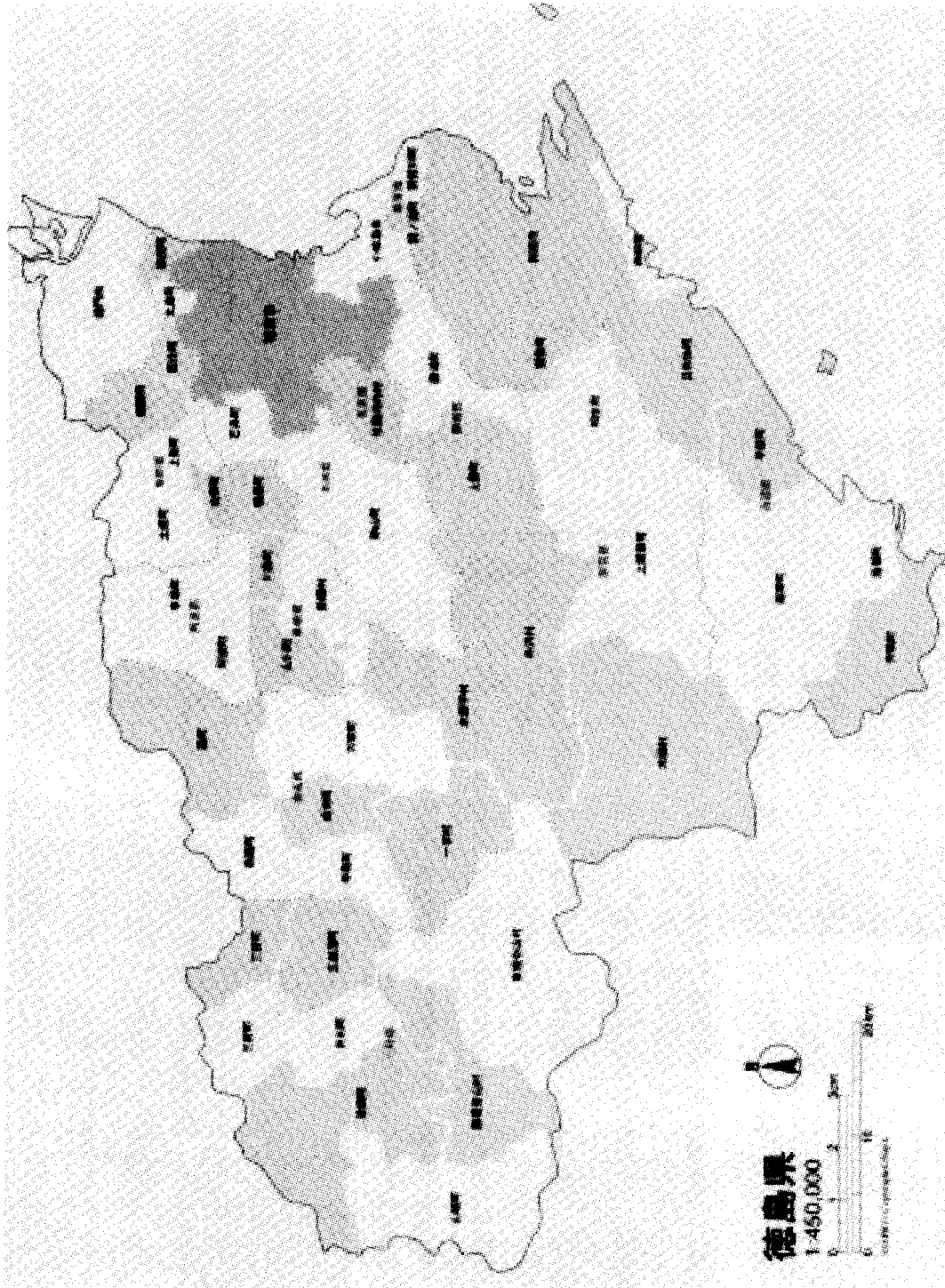
そのような中で、急速に進む少子高齢化や住民の流出、また第一次・第二次産業の停滞などによる過疎化の現実の前で、各町村は地域外との交流を通して、地域の再活性化を図る必要性を実感してきており、その一環として、既存の自然や史跡に頼るだけだったこれまでの観光政策から、新たな観光スポットを開拓し、観光客を引き入れるための施設を整備し、地域外に観光PRを積極的に行うなど、本格的な観光振興策を模索し始めている。

以下では、過疎からの脱却を図る三好郡西部4町村の観光への取り組みを概観し、地域振興策としての観光事業の可能性について考えてみたい。

2. 徳島県三好郡の現状 — 特に西部地区を中心にして

平成7 [1995] 年から平成12 [2000] 年までの5年間に、徳島県三好郡西部地区を構成する池田町、山城町、東祖谷山村、西祖谷山村の各町村では（地図2）、最も人口の減少率の低い池田町でさえ-7.2%、最も高い西祖谷山村では-13.0%となっている。また、西部4ヶ町村全体で見れば、昭和30 [1955] 年から平成12 [2000] 年までの45年間で59,585人から26,884人に激減（-54.9%）しており、昭和55 [1980] 年からの20年間でさえ-24.2%の人口減であり、人口の著しい減少傾向が認められる（表1）。さらに、平成12 [2000] 年の65歳以上人口の割合に関しては、最低の池田町でも31.2%、最高の西祖谷山村では38.3%となっている。一方、15歳未満人口の割合は、最高の池田町でも12.5%、最低の西祖谷山村では9.1%に過ぎない。西部4ヶ町村全体では、平成12 [2000] 年の年齢別人口比率は、15歳未満が12.1%、15歳以上65歳未満が54.8%、65歳以上が33.1%となっており、昭和55 [1980] 年のそれぞれの比率が17.7%、64.2%、18.1%だったことからすると、急速に少子高齢化が進行していることが分かる（表2）。

それに対して、三好郡東部地区の三野町、三好町、井川町、三加茂町の平成7 [1995] 年から平成12 [2000] 年までの5年間の人口動向について見ると、三加茂町の2.7%の微増をはじめ、おおむね微増、微減の状況であり、井川町では-6.7%となっているものの、西部地区の池田町の減少率よりは低く、4町全体では-0.4%の微減に留まっている。東部地区でも、昭和30 [1955] 年から昭和55 [1980] 年までの25年間に40,484人から27,210人に激減（-32.8%）しているものの、その後、減少傾向は弱まり、昭和55 [1980] 年からの20年間の東部地区全体の人口減少は-2.2%に過ぎない（表1）。平成12 [2000] 年の年齢別人口に関しては、人口の減少率が高い井川町で、65歳人口の比率が31.5%と、やはり高く



地図2. 徳島県全図 (行政界)

表1. 徳島県三好郡の人口の推移

	1955年 (昭和30)		1980年 (昭和55)		1985年 (昭和60)		1990年 (平成2)		1995年 (平成7)		2000年 (平成12)	
	人	増減(%)	人	増減(%)	人	増減(%)	人	増減(%)	人	増減(%)	人	増減(%)
池田町	29,894	△28.8	21,292	△1.5	20,965	△6.4	19,616	△5.7	18,490	△7.2	17,163	△7.2
山城町	14,284	△45.9	7,721	△7.0	7,177	△9.0	6,531	△7.4	6,045	△9.0	5,503	△9.0
西祖谷山村	6,433	△57.7	2,724	△5.8	2,565	△9.5	2,321	△5.3	2,197	△13.0	1,911	△13.0
東祖谷山村	8,974	△58.7	3,710	△12.4	3,250	△12.9	2,831	△7.5	2,620	△11.9	2,307	△11.9
西部4町村	59,585	△40.5	35,447	△4.2	33,957	△7.8	31,299	△6.2	29,352	△8.4	26,884	△8.4
三野町	7,757	△32.6	5,226	△0.0	5,224	△3.2	5,055	2.0	5,155	1.2	5,215	1.2
三好町	8,998	△31.5	6,166	0.6	6,206	0.1	6,213	0.2	6,228	△0.9	6,174	△0.9
井川町	10,437	△38.8	6,384	△3.5	6,159	△4.8	5,865	△4.9	5,580	△6.7	5,206	△6.7
三加茂町	13,292	△28.9	9,444	1.9	9,621	0.8	9,695	△0.7	9,765	2.7	10,025	2.7
東部4町	40,484	△32.8	27,220	△0.0	27,210	△1.4	26,828	△0.4	26,728	△0.4	26,620	△0.4
全8町村	100,069	△37.4	62,667	△2.4	61,167	△5.0	58,127	△3.5	56,080	△4.6	53,504	△4.6

出典：三好郡合併問題研究会

表2. 徳島県三好郡西部4町村の年齢別人口の推移

		1985年*1	1990年*2	1995年*3		2000年*4		
		(昭和60)	(平成2)		増減(%)		増減(%)	
4 町 村	人口総数	33,631	31,096	△7.5	29,157	△6.2	26,961	△7.5
	0～14歳 構成(%)	5,948 17.7	5,079 16.3	△14.6 —	4,171 14.3	△17.9 —	3,269 12.0	△21.6 —
	15～64歳 構成(%)	21,585 64.2	19,230 61.8	△10.9 —	17,023 58.4	△11.5 —	14,779 54.8	△13.2 —
	65歳～ 構成(%)	6,098 18.1	6,787 21.8	11.3 —	7,963 27.3	17.3 —	8,913 33.1	11.9 —
池 田 町	人口総数	20,965	19,616	△6.4	18,490	△5.7	17,240	△6.8
	0～14歳 構成(%)	3,987 19.0	3,446 17.6	△13.6 —	2,864 15.5	△16.9 —	2,163 12.5	△24.5 —
	15～64歳 構成(%)	13,645 65.1	12,331 62.9	△9.6 —	10,919 59.1	△11.5 —	9,701 56.3	△11.2 —
	65歳～ 構成(%)	3,333 15.9	3,839 19.6	15.2 —	4,707 25.5	22.6 —	5,376 31.2	14.2 —
山 城 町	人口総数	6,851	6,328	△7.6	5,850	△7.6	5,503	△5.9
	0～14歳 構成(%)	1,021 14.9	832 13.1	△18.5 —	670 11.5	△19.5 —	659 12.0	△1.6 —
	15～64歳 構成(%)	4,249 62.0	3,842 60.7	△9.6 —	3,400 58.1	△11.5 —	2,886 52.4	△15.1 —
	65歳～ 構成(%)	1,581 23.1	1,654 26.1	4.6 —	1,780 30.4	7.6 —	1,958 35.6	10.0 —
西祖谷山村	人口総数	2,565	2,321	△9.5	2,197	△5.3	1,911	△13.0
	0～14歳 構成(%)	400 15.6	349 15.0	△12.8 —	258 11.7	△26.1 —	174 9.1	△32.6 —
	15～64歳 構成(%)	1,595 62.2	1,365 58.8	△14.4 —	1,252 57.0	△8.3 —	1,006 52.6	△19.6 —
	65歳～ 構成(%)	570 22.2	607 26.2	6.5 —	687 31.3	13.2 —	731 38.3	6.4 —
東祖谷山村	人口総数	3,250	2,831	△12.9	2,620	△7.5	2,307	△11.9
	0～14歳 構成(%)	540 16.6	452 16.0	△16.3 —	379 14.5	△16.2 —	273 11.8	△28.0 —
	15～64歳 構成(%)	2,096 64.5	1,692 59.8	△19.3 —	1,452 55.4	△14.2 —	1,186 51.4	△18.3 —
	65歳～ 構成(%)	614 18.9	687 24.3	11.9 —	789 30.1	14.8 —	848 36.8	7.5 —

出典：「池田町総合計画」(2001) p.19;

「山城町総合計画21」(1997) p.8;

「西祖谷山村勢要覧 資料編」(2000) p.3;

「東祖谷山村 第4次総合計画」(2001) p.14;

*1 山城町は1988年

*2 山城町は1993年

*3 山城町は1998年

*4 国勢調査データより補足

なっているをはじめ、他の3町でも20%を超えており、4町全体で27.4%に達している。それに対して、15歳未満人口の割合は、各町とも10%台半ば、全体では15.8%で、西部地区ほどではないにせよ、やはりここでも少子高齢化の進行が認められる(表3)。

なお、三好郡全体で、このような少子高齢化に平行して、急速な核家族化も進行しているものと考えられ、世帯数の推移に関しては、急激な人口減少の続く西部地区でさえ、昭和30[1955]年の11,334世帯から平成12[2000]年の10,211世帯へと45年間で-3.5%の減少に過ぎず、昭和55[1980]年以降人口の減少傾向が弱まった東部地区では、同じ時期7,564世帯から8,563世帯へと微増(3.9%)しており、三好郡全体では-0.2%の微減に止まっている(表4)。

三好郡西部地区の産業構造に関しては、昭和60[1985]年から平成7[1995]年までの10年間では、西祖谷山村で第一次産業(農林業)の就業者が-80.5%減少しているのを最高に、減少率が最も低い山城町でも-45.2%であり、4町全体では-51.7%と半減している。平成2[1990]年からの5年間だけでも東祖谷山村で299人から105人に激減(-65.6%)しているのを筆頭に全町村で減少しており、同じ時期4町村全体で1,890人から1,289人に-31.8%の減少となっている。そのため、西部地区の全就業人口に占める第一次産業の就業者の割合は、昭和60[1985]年の16.9%から平成7[1995]年の9.7%へと減少している(表5)。これらの時期の4町村全体の人口減少率がそれぞれ-13.6%(1985-1995)、-6.2%(1990-1995)だったことからすると(表1)、上記のような第一次産業の就業者の激減は、町村から外部への流出のためだけでなく、若年者の他業種への転業や、核家族化に伴う世帯労働力の高齢化による耕地や山林の放棄が進行したためと考えられるだろう。

それに対して、西部地区全体で、第二次産業の就業者は昭和60[1985]

表3. 三好郡東部4町の年齢別人口（平成12年）

		2000年 (平成12)				2000年 (平成12)	
4 町	人口総数	26,620					
	0～14歳 構成(%)	4,196 15.8					
	15～64歳 構成(%)	15,143 56.9					
	65歳～ 構成(%)	7,281 27.4					
三野町	人口総数	5,215		井川町	人口総数	5,206	
	0～14歳 構成(%)	838 16.1			0～14歳 構成(%)	683 13.1	
	15～64歳 構成(%)	2,899 55.6			15～64歳 構成(%)	2,883 55.4	
	65歳～ 構成(%)	1,478 28.3			65歳～ 構成(%)	1,640 31.5	
三好町	人口総数	6,174		三加茂町	人口総数	10,025	
	0～14歳 構成(%)	1,023 16.6			0～14歳 構成(%)	1,652 16.5	
	15～64歳 構成(%)	3,570 57.8			15～64歳 構成(%)	5,791 57.8	
	65歳～ 構成(%)	1,581 25.6			65歳～ 構成(%)	2,582 25.8	

出典：三好郡合併問題研究会

表4. 徳島県三好郡の世帯数の推移

	1955年 (昭和30)		1980年 (昭和55)		1985年 (昭和60)		1990年 (平成2)		1995年 (平成7)		2000年 (平成12)	
	戸	増減(%)	戸	増減(%)	戸	増減(%)	戸	増減(%)	戸	増減(%)	戸	増減(%)
池田町	6,053	11.9	6,776	0.7	6,823	△2.7	6,638	△1.5	6,539	△2.4	6,385	△2.4
山城町	2,546	△14.7	2,172	△1.9	2,130	△3.6	2,054	0.0	2,055	△3.3	1,988	△3.3
西祖谷山村	1,179	△26.2	870	0.5	874	△1.4	862	2.6	884	△9.3	802	△9.3
東祖谷山村	1,556	△23.3	1,193	△4.9	1,134	0.0	1,134	△3.2	1,098	△5.6	1,036	△5.6
西部4町村	11,334	△2.8	11,011	△0.5	10,961	△2.5	10,688	△1.0	10,576	△3.5	10,211	△3.5
三野町	1,505	△1.5	1,483	1.8	1,509	0.7	1,519	6.3	1,614	3.0	1,662	3.0
三好町	1,643	1.4	1,666	2.3	1,704	5.4	1,796	3.4	1,857	4.2	1,935	4.2
井川町	1,999	△8.9	1,822	△1.0	1,803	0.0	1,803	△1.5	1,776	△1.2	1,755	△1.2
三加茂町	2,417	7.2	2,592	5.0	2,721	5.0	2,856	5.0	2,998	7.1	3,211	7.1
東部4町	7,564	△0.0	7,563	2.3	7,737	3.1	7,974	3.4	8,245	3.9	8,563	3.9
全8町村	18,898	△1.7	18,574	0.7	18,698	△0.2	18,662	0.9	18,821	△0.2	18,774	△0.2

出典：三好郡合併問題研究会

表5. 徳島県三好郡西部4町村の産業別就業人口の動向

		1985年	1990年		1995年	
		(昭和60)	(平成2)	増減(%)	(平成7)	増減(%)
4 町 村	総 数	15,734	14,450	△8.2	13,267	△8.2
	第一次産業 構 成 (%)	2,666 16.9	1,890 13.1	△29.1 -	1,289 9.7	△31.8 -
	第二次産業 構 成 (%)	5,909 37.6	5,572 38.6	△5.7 -	4,939 37.2	△11.4 -
	第三次産業 構 成 (%)	7,152 45.5	6,982 48.3	△2.4 -	7,050 53.1	1.0 -
池 田 町	総 数	9,873	8,933	△9.5	8,408	△5.9
	第一次産業 構 成 (%)	1,287 13.0	847 9.5	△34.2 -	662 7.9	△21.8 -
	第二次産業 構 成 (%)	3,306 33.5	3,011 33.7	△8.9 -	2,713 32.3	△9.9 -
	第三次産業 構 成 (%)	5,280 53.5	5,075 56.8	△3.9 -	5,033 59.9	△0.8 -
山 城 町	総 数	3,427	3,107	△9.3	2,826	△9.0
	第一次産業 構 成 (%)	861 25.1	660 21.2	△23.3 -	472 16.7	△28.5 -
	第二次産業 構 成 (%)	1,443 42.1	1,373 44.2	△4.9 -	1,206 42.7	△12.2 -
	第三次産業 構 成 (%)	1,118 32.6	1,070 34.4	△4.3 -	1,148 40.6	7.3 -
西祖谷山村	総 数	1,178	934	△20.7	890	△4.7
	第一次産業 構 成 (%)	267 22.7	84 9.0	△68.5 -	52 5.8	△38.1 -
	第二次産業 構 成 (%)	506 43.0	419 44.9	△17.2 -	380 42.7	△9.3 -
	第三次産業 構 成 (%)	403 34.2	429 45.9	6.5 -	458 51.5	6.8 -
東祖谷山村	総 数	1,256	1,476	17.5	1,143	△22.6
	第一次産業 構 成 (%)	251 20.0	299 20.3	19.1 -	103 9.0	△65.6 -
	第二次産業 構 成 (%)	654 52.1	769 52.1	17.6 -	640 56.0	△16.8 -
	第三次産業 構 成 (%)	351 27.9	408 27.6	16.2 -	411 36.0	0.7 -

出典：「池田町地域雇用開発プラン」(2001) p.19;

「山城町総合計画21」(1997) p.8;

「西祖谷山村勢要覧 資料編」(2000) p.5;

「東祖谷山村 第4次総合計画」(2001) p.15;

年の5,909人から平成7 [1995] 年の4,939人へと-16.4%減少しており、就業人口の構成の上では37.6%から37.2%へと微減している（表5）。これらの大部分は公共事業に関わる人々であり、今後も就業者数、構成比ともに減少は続くものと思われる。第三次産業では、4町村全体で昭和60 [1985] 年から平成7 [1995] 年までの10年間に7,152人から7,050人へと微減（-1.4%）しているが、1990年からの5年間では1.0%の微増であり、ことに西祖谷山村と東祖谷山村では、昭和60 [1985] 年から平成7 [1995] 年の10年間で、それぞれ13.6%と17.1%の増加となっている。また、4町村全体の第三次産業の就業者の構成比は、10年間に45.5%から53.1%に増加しており、今後、新規に就業する若者や、農林業や公共工事からの転業者、都会からのU・Iターン組といった就業人口の受け皿として成長することが予想される（表5）。

他方、三好郡東部の4町では、比較的第一次産業に就いている人口の割合が高く、平成12 [2000] 年の国勢調査によると、三野町23.1%、三好町20.9%、三加茂町15.2%、割合の最も低い井川町でも10.3%で、全体では17.2%である（表6）。ここでは産業別就業者人口の推移に関する通時的なデータは無いが、井川町は、三好郡東部の他3町で1980年代以降人口の急激な減少に歯止めが掛かっているのに対して、人口の流出が続いており、その多くが第一次産業の就業者だったと推測される。第二次産業と第三次産業の就業者比率に関しては、各町間に西部4町村ほどのばらつきはなく、東部全体でそれぞれ35.5%と47.2%を占めている（表6）。

三好郡の財政状況については、いずれの町村も自主財源の割合が低く、地方交付税等に大きく依存しているため、平成12 [2000] 年度の三好郡全体の財政力指数は0.219となっている。東部地区では最高の三加茂町が0.260、最低の井川町が0.173で大きな差はないのに対して、西部地区では、最高の池田町が0.351である以外はすべて0.200を下回り、西祖谷山村に至

表6. 徳島県三好郡東部4町の産業別就業人口（平成7年）

		1995年 (平成7)				1995年 (平成7)	
4 町	総 数	12,847					
	第一次産業 構 成 (%)	2,216 17.2					
	第二次産業 構 成 (%)	4,563 35.5					
	第三次産業 構 成 (%)	6,068 47.2					
三 野 町	総 数	2,524		井 川 町		総 数	2,501
	第一次産業 構 成 (%)	584 23.1				第一次産業 構 成 (%)	257 10.3
	第二次産業 構 成 (%)	836 33.1				第二次産業 構 成 (%)	956 38.2
	第三次産業 構 成 (%)	1,104 43.7				第三次産業 構 成 (%)	1,288 51.5
三 好 町	総 数	3,217		三加茂町		総 数	4,605
	第一次産業 構 成 (%)	673 20.9				第一次産業 構 成 (%)	702 15.2
	第二次産業 構 成 (%)	1,178 36.6				第二次産業 構 成 (%)	1,593 34.6
	第三次産業 構 成 (%)	1,366 42.5				第三次産業 構 成 (%)	2,310 50.2

出典：三好郡合併問題研究会

っては0.094という低い水準となっている。各町村の地方債残高の増加に伴い公債費比率も、東祖谷山村と井川町で若干の減少傾向が見られるものの、他の町村では横這いか増加してきており、将来的に自治体の財政を圧迫することは確実である。また、財政の弾力性を示す経常収支比率に関しては、町村では70%ほどが適当とされているが、平成12〔2000〕年度、最低の山城町でも78.1%で、最高の三野町では88.0%であり、全体では83.8%にも達し、いずれの町村も経常収入の大部分を人件費や地方債の償還など義務的経費に当てざるをえず、自由に使用できる財源があまりない状況を示している（表7）。

今日の全国的な市町村合併の流れの中で、人口減少、少子高齢化、財政の悪化が急速に進行する徳島県三好郡でも、合併特例法の期限が切れる平成17〔2005〕年3月末までに全町村が合併し、5万人規模の市になるか、東西地区それぞれが2万5,000人ほどの町を作るか、それとも、これまでどおり各町村が単独で自治体運営を行うかという問題に直面しているが、もはや時間が限られているにもかかわらず、全体的にはあまり議論が活発であるとはいえない。そうした中で、西部地区の4ヶ町村は単独または共同で、これまでの公共土木事業に大きく依存した産業構造から、観光事業を中心としたそれへの転換を図ろうとしている。以下では、筆者の聞き取り調査や各種の資料をもとに、各町村の観光の現状や、現在進行しつつある具体的な事業計画を概観し、これらが当該の町村が直面する過疎化や財政悪化の状況を克服し、地域を活性化する材料となりうるか否かを検討したい。

表7. 徳島県三好郡8町村の財政状況の推移

		1995年 (平成7)	1996年 (平成8)	1997年 (平成9)	1998年 (平成10)	1999年 (平成11)	2000年 (平成12)
池田町	財政力指数	0.358	0.358	0.359	0.360	0.353	0.351
	経常収支比率	83.3	86.6	82.7	85.3	79.0	84.0
	公債費比率	14.1	14.6	15.1	15.1	15.5	15.2
山城町	財政力指数	0.156	0.142	0.131	0.138	0.132	0.133
	経常収支比率	78.6	82.2	79.2	86.1	78.2	78.1
	公債費比率	12.8	14.8	15.8	18.7	18.5	17.6
西祖谷山村	財政力指数	0.092	0.091	0.091	0.091	0.091	0.094
	経常収支比率	81.5	79.3	80.4	79.5	81.5	79.8
	公債費比率	13.0	12.3	13.9	15.7	21.9	19.6
東祖谷山村	財政力指数	0.094	0.096	0.100	0.103	0.097	0.106
	経常収支比率	80.9	84.2	82.6	83.1	85.0	86.6
	公債費比率	15.3	15.0	13.9	12.8	13.2	12.1
三野町	財政力指数	0.188	0.191	0.201	0.209	0.214	0.213
	経常収支比率	84.8	87.2	86.4	89.2	84.1	88.0
	公債費比率	14.4	16.7	17.2	17.7	17.9	18.0
三好町	財政力指数	0.185	0.199	0.203	0.209	0.201	0.203
	経常収支比率	81.7	83.6	84.9	85.3	84.2	86.4
	公債費比率	13.4	14.2	14.1	13.1	13.2	12.7
井川町	財政力指数	0.164	0.171	0.172	0.176	0.170	0.173
	経常収支比率	80.1	81.2	80.7	76.8	78.9	79.7
	公債費比率	13.2	13.3	13.4	10.4	11.4	8.1
三加茂町	財政力指数	0.234	0.234	0.242	0.240	0.241	0.260
	経常収支比率	80.7	82.8	86.5	87.5	83.9	87.7
	公債費比率	12.8	12.7	13.2	15.0	15.3	16.9
三好郡全体	財政力指数	0.211	0.214	0.213	0.217	0.206	0.219
	経常収支比率	81.8	83.8	83.0	84.6	81.4	83.8
	公債費比率	—	—	—	—	—	—

出典：三好郡合併問題研究会

(単位：%)

3. 徳島県三好郡4ヶ町村の観光事業への取り組み

(1) 池田町

吉野川が上流部から中流部に大きく右折する位置にある池田町は、中津山を最高峰とする山岳群が連なる起伏の激しい地形で、総面積167.80km²の内8割以上の138.01km²が森林となっており、平地はわずか7.8%の29.79km²に過ぎない。明治38〔1905〕年に町制が施行された後、昭和31〔1956〕年に箸蔵村が編入され、昭和34〔1959〕年には三縄村、佐馬地村と合併して現在の池田町となった。池田町は、江戸時代からタバコや木材、菓子や酒の製造と流通で賑わい、交通の要衝、宿場町として栄え、中でも池田のタバコは全国的にも有名で、タバコを取り扱う商家がそれぞれに工夫と意匠を凝らしてうだつを上げた家々が、現在でも本町通り周辺に「うだつの町並み」として残り、観光名所の一つとなっている。明治37〔1904〕年の煙草専売法公布によりタバコ産業が民間から官営に移ると、タバコ製造は産業としては衰退していった¹。

とはいえ、専売公社（後のJT）の池田工場は町や周辺地域に多くの雇用を提供していたし、そこへ原料を供給する葉煙草農家、工場の従業員たちに商品やサービスを提供する第三次産業が栄えるなど、町の経済に大きく貢献してきた。また、JT池田工場が平成2〔1990〕年にタバコ製造を中止した後も、JTと住友電装が共同出資した四国ジェイティエス電装（SJTS）が同地で自動車用ワイヤハーネスを製造していたため、町は一定の雇用と税収を確保していたが、同社は平成15〔2003〕年3月末には解散することが決定しているため、現在、町は早急な雇用・財政対策を迫られている。

1 池田町（2001年3月）「池田町地域雇用開発プラン」pp.1-2；
池田町（2001年3月）「池田町総合計画 水・緑・花そしてひとが輝く四国のへそ池田」p.10。

このような中で、四国のほぼ中央に位置し、「四国のへそ」を自認する池田町は、近年の道路網の急速な整備の結果、各県都（高松、徳島、高知、松山）と1時間半以内で結ばれており、また、本四架橋の開通により、岡山からはJRで1時間15分ほど、京阪神からは高速バスで3時間半ほどとなり、外部とのアクセスが格段に改善された。そのため、町は「交流」を地域おこし戦略の中心に据え、北海道、長野県、福井県、岐阜県、大阪府、香川県の池田町や池田市とともに「全国池田サミット」を持ち回り開催したり、「北海道のへそ」（富良野市）、「日本の真ん中」（群馬県渋川市）、「日本の人口の重心」（岐阜県美並村）など、様々な理由で「へそのまち」を自認する全国の15市町村と「全国へそのまち協議会」を結成し、やはり持ち回りでサミットを開催するなど、行政レベルだけでなく、各種団体の自主的交流を含めた町民レベルでの交流が拡大・深化しつつある。ただし、当初の目的であった物産交流や、特産品の共同開発といった企業間交流の進展には課題を残している²。

また、交流のまちづくりを進める上で、池田町は観光関連事業にも力を入れ始めており、実際町内には、四国八十八ヶ所の六十六番札所である雲辺寺、金毘羅奥の院として人々の信仰を集める箸蔵寺、多数の希少な植物の群生が見られ、近年訪れる人が増え始めた黒沢湿原、切り立った断崖に九十九折の細い車道が走り、秋には谷全体に美しい紅葉が見られる祖谷溪、毎年8月14-16日、多くの連が繰り出す池田阿波踊りなど、数多くの観光資源が存在する。これらへの入込み客数は、三好郡西部地区の他町村の観光スポットへのそれと比べても、決して少ない数ではない（表8）。

2 池田町(2001年3月)「池田町総合計画 水・緑・花そしてひとが輝く四国のへそ池田」p.150。

表 8. 徳島県三好郡西部地域の主要観光スポットへの入込客数の推移

	雲 辺 寺 (池田町)		箸 蔵 寺 (池田町)		祖 谷 溪 (池田町)	
		増減 (%)		増減 (%)		増減 (%)
1996 (H08)	270	—	200	—	120	—
1997 (H09)	269	△0.4	190	△5.0	121	0.8
1998 (H10)	270	0.4	199	4.7	126	4.1
1999 (H11)	279	3.3	153	△23.1	127	0.8
2000 (H12)	243	△12.9	132	△13.7	104	△18.1
	池田阿波踊り (池田町)		大 歩 危 (山城町)		小 歩 危 (山城町)	
		増減 (%)		増減 (%)		増減 (%)
1996 (H08)	80	—	886	—	203	—
1997 (H09)	80	0.0	894	0.9	205	1.0
1998 (H10)	90	12.5	1,267	41.7	291	42.0
1999 (H11)	95	5.6	826	△34.8	190	△34.7
2000 (H12)	100	5.3	764	△7.5	176	△7.4
	塩 塚 高 原 (山城町)		か ず ら 橋 (西祖谷山村)		剣 山* (東祖谷山村)	
		増減 (%)		増減 (%)		増減 (%)
1996 (H08)	150	—	294	—	150	—
1997 (H09)	109	△27.3	294	0.0	100	△33.3
1998 (H10)	109	0.0	398	35.4	160	60.0
1999 (H11)	79	△27.5	283	△28.9	150	△6.3
2000 (H12)	59	△25.3	287	1.4	150	0.0

出典：三好郡合併問題研究会

(単位：千人、%)

* 東祖谷山村役場の資料に基づき訂正

しかし、これらの観光スポットやイベントはどれも、後述の山城町の大歩危・小歩危、西祖谷山村のかずら橋、東祖谷山村の剣山などのような全国的な知名度に欠けている上に、町内に広く分散しており、それぞれの客層も異なるため、これらの観光対象を満遍なく巡る人は少なく、日帰り客が大部分である。そのため、池田町はむしろ、山城町や東・西祖谷山村への観光の出発点と位置付けられているのが現状である。

(2) 山城町

徳島県の最西部に位置し、北は池田町、東は西祖谷山村、西は愛媛県新宮村、南は高知県大豊町に接する山城町は、総面積131.57km²の内85%が森林で、大部分が急峻な山地で占められている。人々は、町の東端を南北に流れる吉野川や、その他の河川の流域に広がる48の基礎集落に分かれて暮らしているが、それらの集落は、主として山腹に点在している。昭和28〔1953〕年の町村合併促進法の施行に伴い、昭和31〔1956〕年に旧三名村が山城谷村に編入合併され、それと同時に町制が施行され、現在の山城町が誕生した。町は経済的に瀬戸内圏との結び付きが強く、多くの人々が愛媛県の川之江市、伊予三島市の工業地帯へ通勤している³。

前節で見たように、山城町では少子高齢化が急速に進行しており、町は三好郡西部地区の他の町村に比べれば、第一次産業就労者の割合が高く、補助事業等により人工林の保育施行を実施したり、第三セクターの「株式会社山城もくもく」を設立して集成材の製造・販売を行うなど、林業振興や木材資源の有効活用に取り組んできたものの、離農や転業が進み、農林業における高齢化、後継者不足が特に深刻である⁴。その他、製

3 山城町(2000年9月)「過疎地域自立促進計画(平成12年度～平成16年度)」p.1。

4 山城町(1997年)「山城町総合計画21」p.3。

材業、縫製業といった地場産業も全般的に小規模で生産性も低く、若年労働者を多数吸収する条件は整っていない。そのため、町では、前期過疎地域活性化計画によりゴルフ場を建設し、数十人の地元雇用を創出したり、若者定住促進条例、定住転入者奨励条例を制定したり、各種施設の建設・整備を行うことによって、若者の定住や雇用の増大を図ってきたが、過疎化からの脱却を達成するにはいたっていない。さらに、町は町外からの工場誘致も進めてきたものの、町の自然条件および社会条件のために実現していない。また、町の商業はほとんどが家族経営で、周辺地域における大型店の進出や、自家用車の普及により、購買力の大半が町外へ流出している⁵。

このような中で、山城町には、大歩危・小歩危、塩塚高原のキャンプ場といった魅力ある観光スポットがあり、中でも吉野川が作り出す大歩危・小歩危の奇岩は全国的に知られる景勝であり、毎年100万人近い人々が訪れており（表8）、30万人が大歩危の舟下りを楽しんでいる。町では、観光客に地質学的に珍しい大歩危について解説したり、観光情報を提供する目的で、平成8〔1996〕年に「石の博物館」と「山城情報館」を併設する「ラピス大歩危」を建設し、第三セクターの「株式会社山城しんこう」がその運営に当たっている。また最近では、日本でも有数のラフティング・スポットとして、4月から11月までのシーズン中は、全国各地から3万人もの人々が訪れている。そのため、この吉野川のラフティングや、池田湖でのカヌー、祖谷溪でのシャワークライミングなどを、塩塚高原や祖谷溪のキャンプ場での宿泊と組み合わせれば、池田町と山城町にまたがる広域アウトドア・コースを作り出すことも可能だろう。

5 山城町（2000年9月）「過疎地域自立促進計画（平成12年度～平成16年度）」p.9;14。

しかし、現在、この地でラフティングを開催する業者は大小合わせて14社あるが、町内に事務所を置く業者は2社しかなく、それも町外の業者がシーズン中だけ開設しているもので、地元のラフティング・ツアーの業者は1社もない。また、シーズン中はちょうど鮎の漁期とも重なっているため、業者は地元の漁協としばしば衝突しており、両者は協議会を設置し、ラフティングの時間帯制限を設けるなど、両者の棲み分けが模索されている。そのため、今後、吉野川がラフティング・スポットとして成長してゆくためには、行政が主導して町内のラフティング・ツアー業者を育成するとともに、業者と漁協の利害調整に積極的に乗り出す必要があると思われるが、町では、いまだラフティングという観光資源を有効に活用しようという動きは見られず、業者と漁協の話し合いにも関与しようとはしていない。そもそも山城町には、観光関連の独立した部局がなく、観光への取り組みが三好郡西部の他の3町村に比べて概して低調であるように思われる。

(3) 西祖谷山村

西祖谷山村は、北は池田町、井川町、三加茂町に、西は山城町、東は東祖谷山村、南は高知県大豊町と境を接しており、その総面積は106.06 km²で、内92%を森林が占め、吉野川、祖谷川、松尾川が生み出す海拔170 mから1,670mに及ぶ高低差を有する急峻な地形の内のわずかな平地を利用して集落が発達している。約1,200年前、恵伊羅御子と小野老婆によって開山されたとされる祖谷山は、明治12 [1879] 年に郡区町村編成法の施行により東西に分割され、明治22 [1889] 年の市町村制により西祖谷山村が成立した⁶。

6 西祖谷山村(2000年9月)「過疎地域自立促進計画(平成12年度～平成16年度)」p.1。

三好郡西部の他の町村と同様、急速な少子高齢化によって、過疎化に苦しむ西祖谷山村は、特に第一次産業における就業者の高齢化や後継者の不足が著しく、また、地理的条件によって村外からの企業誘致も、小規模な縫製工場の進出を除いて全体的に難しく、商業に関しても小規模個人経営がほとんどを占めるため、消費者ニーズの高度化、多様化に対応できず、購買力の村外流出が顕著になっている⁷。地場産業を振興する目的で、現在農家が力を入れて栽培に取り組んでいるゼンマイを原料とした山菜加工施設や、主に有瀬地区で栽培の盛んなお茶を利用した製茶工場も稼働しているが、お茶やゼンマイの大半はこれらの施設には行かず、村外の業者が買い取って行くため、村のブランドを確立することが困難な状況であるという。また、近年は中国から安いゼンマイが大量に輸入されるようになり、農家にとって、新たな収入源として始められたゼンマイ栽培の先行きも決して楽観できないという。

このように、農林業、製造業、小売業のいずれにおいても、収入の増加や若年者の雇用拡大への有効な方策が見付けられない中で、村には国の重要有形民俗文化財の指定を受けているかずら橋をはじめ、屋島の戦いに敗れ、安徳天皇を奉じて祖谷山へ落ち延びたとされる平家落人たちの一人で、安徳天皇の御殿医だった堀川内記の子孫の屋敷と伝えられる平家屋敷、同じく南朝の楠木正成の家臣で、湊川の戦いに破れ祖谷山に逃げ込んだ武士の屋敷とされる徳善屋敷、また、昭和63〔1988〕年、竹下首相による「ふるさと創生資金」の1億円交付をきっかけに始められた温泉掘削事業の結果、平成9〔1997〕年8月にオープンした村営の健康増進施設「祖谷秘境の湯」および、それに隣接して建設され、平成12〔2000〕年5月にオープンした第三セクター方式の交流研修宿泊施設であ

7 西祖谷山村(2000年9月)「過疎地域自立促進計画(平成12年度~平成16年度)」p.17。

るホテル「秘境の湯」など、多くの観光資源を有している。

中でも、かずら橋は全国的に有名な観光スポットであり、本四架橋開通以後は本州からのアクセスが格段に良くなり、関西方面を中心に入込み客数が増え、特に瀬戸大橋の開通（昭和63〔1988〕年4月10日）や、明石海峡大橋の開通（平成10〔1998〕年4月5日）直後には、それぞれ前年度より64.4%、35.4%も入込み客が増加している（表9）。現在は、轟音を立てる急流を10メートル以上の眼下に見ながら、シラクチカズラで編まれた揺れの激しい吊り橋を渡る目的で、年間30万人もの観光客が訪れ、橋は渡らず、見に来ただけの人も含めると60～70万人に達し、橋の通行料（現在、大人500円）だけで年間1億4,000万円ほどの収益を上げている。

村は、観光立村を基本構想の柱に掲げ、今後もかずら橋と秘境の湯を中心に観光客数の増大を図って行く計画であり、特にかずら橋周辺に、平成12年度から16年度までの5ヶ年計画で、総事業費30億円をかけてイベント広場・駐車場等を整備することで、現在既に飽和状態となっている受け入れ態勢を充実し、各種イベントの開催や特産品の販売等による都市住民との地域間交流の創出を図り、地域の活性化や若者定住の促進を目指している⁸。

(4) 東祖谷山村

1185〔元暦2〕年2月19日、屋島の戦いに敗れた平家一門の中で、門脇中納言平教盛^{たいらののりもり}の次男従四位越後守國盛^{くにもり}が率いる百余騎の落人たちが、安徳天皇を奉じて阿讃山脈を越え、吉野川を遡って密林に分け入り、近

8 西祖谷山村（2000年）「事業概要書 特定地域における若者定住促進緊急プロジェクト・中山間地域総合整備事業（かずら橋イベント広場整備）合併事業〔西祖谷山村起業〕」。

表9. 東西祖谷山村の主要観光スポットへの入込客数の推移

	かずら橋 (西祖谷山村)		秘境の湯 (西祖谷山村)		二重かずら橋 (東祖谷山村)		剣山 (東祖谷山村)		三嶺 (東祖谷山村)	
	人数	増減(%)	人数	増減(%)	人数	増減(%)	人数*1	増減(%)	人数*2	増減(%)
1985 (S60)	198,663	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1986 (S61)	242,233	21.9	-	-	-	-	-	-	-	-
1987 (S62)	192,023	△20.7	-	-	-	-	-	-	-	-
1988 (S63)	315,702	64.4	-	-	-	-	-	-	-	-
1989 (H01)	284,258	△10.0	-	-	-	-	-	-	-	-
1990 (H02)	320,702	12.8	-	-	-	-	-	-	-	-
1991 (H03)	336,768	5.0	-	-	-	-	-	-	-	-
1992 (H04)	313,295	△7.0	-	-	20,229	-	130,000	-	10,300	-
1993 (H05)	283,840	△9.4	-	-	18,456	△8.8	130,000	0.0	12,000	16.5
1994 (H06)	284,917	0.4	-	-	25,286	37.0	130,000	0.0	13,000	8.3
1995 (H07)	284,652	△0.1	-	-	27,103	7.2	107,000	△17.7	12,000	△7.7
1996 (H08)	293,656	3.2	-	-	28,418	4.9	150,000	40.2	15,000	25.0
1997 (H09)	294,022	0.1	53,520	-	22,849	△19.6	100,000	△33.3	13,000	△13.3
1998 (H10)	398,094	35.4	79,373	48.3	35,794	56.7	160,000	60.0	26,000	100.0
1999 (H11)	283,030	△28.9	69,458	△12.5	29,288	△18.2	150,000	△6.3	26,000	0.0
2000 (H12)	286,672	1.3	82,444	18.7	30,836	5.3	150,000	0.0	27,000	3.8
2001 (H13)	299,465	4.5	81,815	△0.8	-	-	-	-	-	-

*1 概数
*2 概数

出典：西祖谷山村役場
東祖谷山村役場

隣の土豪たちを降して住民を従え、再起の日を待ちつつ、武技の鍛錬や軍馬の調練を行ったという伝説が残り、平家の落人の消息を伝える多くの史跡が現存する東祖谷山村は⁹、剣山から流れる祖谷川上流一帯を占め、JR土讃線阿波池田駅から車で1時間半の距離にあり、総面積228.62km²で、そのうち山林が95%を占めている。地形的には山地が圧倒的に多く、それを穿つように格子状に河谷が発達し、平地は比較的大きな河川の合流点沿いにわずかにあるだけで、このような立地条件の下、山崩れ、地滑り等の自然災害が多く、人々の生活基盤を脅かしている¹⁰。

やはり東祖谷山村でも少子高齢化と過疎化の進行は第一次産業を中心に影響を及ぼしており、農業と林業は就労者の高齢化、新規就業者の不足による農業不振や森林の荒廃といった問題に直面している。他方、村は、主に交通通信、生活環境施設、厚生施設の整備といった公共事業を数多く行い、雇用機会の増大を図ってきたため、現在村の産業構造に占める公共事業の位置は極端に大きい。しかし、そもそも独自財源に乏しい村では、国や県からの財政補助が不可欠であるが、近年の国の行財政改革の動きと、地方分権の流れの中で、地方交付税交付金や国庫補助事業なども減少してきているのが現状である¹¹。

そのため、役場や議会の中でも、これまでのような公共事業主体の産業構造の限界は、十分に自覚されてきており、新たな収入と雇用確保の手段として、観光関連事業の推進が模索され始めている。村役場や村内の諸組織もこれまでに、観光客を村に呼び込むため、8月14日、15日の「奥祖谷夏まつり」、10月最終土曜日の「祖谷平家まつり」、8月から11月にかけての「そばオーナー制」といった様々なイベントを企画したり、青少年旅行村（2000〔平成12〕年現在、年間入込客数2,450人）や龍宮崖

9 徳島県三好郡東祖谷山村誌編集委員会（1978年11月）『東祖谷山村誌』pp.196-197;pp.200-201

10 東祖谷山村（2001年3月）「第4次総合計画」pp.11-12。

11 東祖谷山村（2000年）「過疎地域自立促進計画（平成12年度～平成16年度）」pp.2-5。

公園（同699人）、民俗資料館（同3,122人）などの施設を建設したりしており、村はインターネット上で、村内の観光スポットの情報を発信しているが（<http://www1.sphere.ne.jp/east-iy/> [東祖谷山村HP]）、これらの努力はいまだ村への観光客数の増大という結果を生み出しているとはいえない。また、西日本有数の名山として知られる剣山と三嶺^{みうね}には、毎年それぞれ15万人と3万人の登山客が訪れているが（表9）、彼らの多くは登山のみを目的とした日帰り客で、その他の観光施設にはあまり関心を示さず、特に剣山の場合、大半がツアー客であり、食事などもツアー会社が用意しているため、地元への経済効果はあまりにも小さい。

そのため、村では現在、村内に点在する観光資源を有機的に結び付ける拠点として機能する滞在型の施設とするべく、上述の青少年旅行村を、老朽化に伴う改築を機に、温泉・宿泊とともに、登山、各種スポーツ、溪流釣り、ソバ打ち体験まで楽しめることを謳った大規模なリクリエーション施設「いやしの郷」に拡張することを計画しており、温泉・宿泊棟についてはすでに完成間近である¹²。ただし、計画（案）では、この施設全体の総事業費は約43億円にも上り、一部の事業は、「山村振興事業」や「林業構造改善事業」といった国庫補助金を受けて行われているが、現在の村や国の逼迫した財政状況の下で、今のままでの事業計画の実現が可能かどうかは不透明である。

そして、そもそも東祖谷山村を全国的に有名にしているのは、平家の隠れ里という伝承だが、その由来となった「鉾杉（別名 國盛杉）」（大枝地区）、「御火葬場」（栗枝渡地区）、「阿佐家住宅（別名 平家屋敷）」（阿佐地区）、「平家の馬場」（剣山）などの数多くの遺物や遺構を観光資源として活用する企画が十分に練られているとはいえない。

11 東祖谷山村（2000年）「過疎地域自立促進計画（平成12年度～平成16年度）」pp.2-5。

12 東祖谷山村（2000年4月）「そばの郷整備計画（案）」

(5) 三好郡西部の広域観光

上記のように、三好郡西部の4ヶ町村には全国的に有名な史跡や景勝地、観光開発の余地のある資源が多数存在しているが、各町村の中に点在しており、各スポット間のアクセスも未整備の状態である。例えば、西祖谷山村のかずら橋を訪れた旅行者の中には、同様の東祖谷山村の二重かずら橋も訪ねてみたいと思う人が多数いるだろうが、それぞれは車で1時間の距離であり、東祖谷山村の京上から二重かずら橋までは道幅が狭く大型バスが入れないため、ツアー会社からも敬遠されてしまっている。その結果、鬱蒼とした森に囲まれ、土産物屋などもほとんどない二重かずら橋は、西祖谷山村の観光地化されたかずら橋以上に秘境的であり、訪れた人にはより多くの感銘を与えているものの、現在、西祖谷山村のそのの十分の一の入込み客数（年間約3万人）しかない。

反面、平家落人伝説に関係した史跡は東・西祖谷山村にまたがり、ラフティング、カヌー、シャワークライミング、キャンプといったアウトドア活動に最適な資源は池田町と山城町に分散しており、また、宮尾登美子の小説『天涯の花』によって一躍有名になった高山植物キレンゲショウマの群生が見られる剣山、国の天然記念物にも指定されている高山植物コメツツジの大群落を有する三嶺、サギソウ、キセルアザミ、シロバナトキソウなど湿原植物の宝庫である黒沢^{くろぞう}湿原といった自然散策を愛する人々を惹き付けるスポットは東祖谷山村と池田町に多いため、各町村が一体となって観光開発を行えば、観光客の目的に応じた多彩な広域観光ルートを設定することも可能だろう。そのため、三好郡西部の4町村は、これらを有機的に結び付け、上述のような広域観光ルートを作り出す目的で、昭和50〔1975〕年、「三好郡西部町村観光協議会」を組織し、秘境めぐりの「ボンネットバス」事業をはじめ、観光パンフレットを作成したり¹³、関東や関西で共同PR活動を行うなどの取り組みを行ってき

た。

しかし、これまでのところは、観光PRに関しては協力して行うが、観光資源の開発は各自治体がそれぞれに行うという形で進められてきた。このような中で、上記4町村のうち、最も広域観光の振興に力を入れてきた自治体は池田町だろう。先述のように、池田町は多くの観光資源を有しており、かつては池田高校が池田町の名を全国的に有名にしていたが、現在は強力な観光アトラクションに欠け、観光客にとって、単なる通り抜け地点か、祖谷地方や大歩危・小歩危への観光の出発点という位置付けしか与えられていない。そのため、町の観光行政に携わる人々や観光関連業者は、SJTSの撤退、地場産業の低迷や過疎化の進行の中で、観光を中心に据えた地域おこしのためには、観光の目玉となるようなスポットの開発が急務と考えている。そこで、池田町は、町内に宿泊客を引きとめ、山城町や東・西祖谷山村を含めた三好郡西部地区の広域観光の拠点となる施設整備の一環として、現在、三好郡西部地区のほぼ中央に位置する松尾川の溪流沿いで温泉開発を進めている。

4. 観光事業と地域おこし

平成9 [1997] 年の時点で、全国の市町村の約38%、人口では約6%、面積では約49%を占める過疎地域の自治体の多くが、観光によって所得の増加や新たな雇用を生み出し、地域を活性化するため、観光関連の担当課を設け、観光関係審議会や「観光基本計画」を作成して、観光行政に力を入れており、主として第三セクター方式で運営される観光・リクリエーション事業を積極的に推し進めた結果、観光客も徐々に増加して

13 三好郡西部町村観光協議会 (n. d.) 「阿波歴史文化回廊・緑色回廊 秘境浪漫を巡る旅」。

きている。例えば、昭和60 [1985] 年のそのような事業への入込客数を100とする指数で見ると、平成7 [1995] 年には、全国の124に対して過疎地域では146と大幅に上回っており、延べ宿泊客数も、昭和63 [1988] 年に6,300万人に達して以降、安定的に推移している¹⁴。

これまで見てきたように、三好郡西部4町村においては、従来、所与の自然や史跡を観光資源として有効に活用してきたとはいえ、例えば、吉野川のラフティングや剣山登山は全国的に有名で、毎年多くの観光客を集めているにもかかわらず、地域の経済にはほとんどインパクトを与えていない。また、西祖谷山村のかずら橋は観光スポットとしては最も成功しており、毎年一定の観光収入を地域にもたらしており、周辺には民宿や土産物屋などの観光エリアが形成されるまでにはなっているが、単体では大勢の観光客を地元の施設に宿泊させるだけの吸引力は持たず、大部分の見物人はその日のうちに、池田町や高知方面に移動してしまうため、実際には架け替えなどの維持費や人件費分をまかなえるほどの収益しかないという。

ところが、近年、過疎化の進行と第一次・第二次産業の停滞という状況の下で、ようやく様々な観光政策が自治体の単独事業または近隣町村の共同事業として行われるようになってきた。三好郡西部町村観光協議会によって共同で行われている観光バスの運行事業やPR活動を除けば、各自治体の観光関連事業は温泉を中心とした健康保養施設であったり、研修や宴会にも利用できる宿泊施設であったり、各種の資料館であったりというように、公共工事による施設建設が中心であり、その後の運営は、第三セクター方式が採られることが多い。

14 鎌田辰良(2000年8月)『文化経済学ライブラリー4 観光の文化経済学』芙蓉書房出版、pp.68-72。

昭和61 [1986] 年の「民間事業者の能力の活用による特定施設の整備の促進に関する法律（民活法）」、昭和62 [1987] 年の「民間都市開発の推進に関する特別措置法」および「総合保養施設整備法（リゾート法）」以降、公共部門は民間企業の人材やノウハウの活用を、民間部門はリスク分散、許認可等の手続きの容易さ、税制上の優遇などを期待して第三セクターによる事業が全国各地で推進された。また、当時はバブル期にあたり、国や地方に大きな税収増が生じ、民間部門でも過剰な流動性が起こり、新しい分野や大規模事業への進出を促進したため、このような事業の進展が一層加速される結果になった¹⁵。しかし、バブル崩壊後の1990年代、長期に及ぶ経済不況の中で、これらの施設の多くが経営悪化に陥った¹⁶。何億円、何十億円もの負債を抱え、経営建て直しの目途も立たない上に、地価の急激な下落のために売却して資金回収することもできず、また、倒産によって生じる責任問題を怖れて、赤字額を年々増やし続けている施設が数多くある¹⁷。

三好郡西部の町村が建設を進めている各施設の場合、西祖谷山村の「秘境の湯」などのように、中には一定の集客力を持ち、将来性のある施設もないではないが、地域の観光産業の振興という目的からすれば、民間との協力が不可欠であるはずが、多くの場合、町村長が社長を務め、むしろ民間と競合する形になっており、果たして地域発展の牽引力となり得ているかは疑問がある。

また、これら各町村の観光政策は、これまでのところ温泉掘削とレジャー施設の建設というように発想が重複しており、単独町村を超えた広域観光に対する戦略が欠けているように思われる。というのも、温泉に関

15 林宏昭・橋本恭之(2002年3月)『入門地方財政』中央経済社、p.193。

16 林宏昭・橋本恭之(2002年3月)『入門地方財政』中央経済社、pp.193-194。

17 三井物産業務部「ニューふぁ～む21」チーム編(2000年3月)『「町おこし」の経営学 官と民の新たな関係』pp.51-52

しては、既に西祖谷山村の施設が全国的に有名になりつつあり、近隣町村に同様なより新しい施設が誕生すると、町村間に過当競争が生じ、共倒れとなる恐れさえある。レジャー施設に関しては、各町村に既にキャンプ村が整備されており、現在のところ飽和状態である。さらに、池田町には立派な運動公園があり、周辺市町村の人々にも利用されているのみならず、全国の市町村とスポーツを通じた交流が行われている。そのため、現在計画されている前述の「いやしの郷」（東祖谷山村）にどれだけの必要があるのか危ぶむ声が村の内外にある。

上述のように、この地域はもともと特異な自然や独特の歴史的・文化的背景を持っており、活用次第では魅力的な観光地となる素地が充分にあるように思われる。そのため、これまでのような単独町村による観光開発という方向から、三好郡西部地区の広域観光という視点に転換を図れば、逼迫した地方財政の現状の中で、用途の重複した施設をいくつも作る必要はないだろう。限られた財源を効率的に活用し、様々な目的・志向を持った観光客に対応するためには、広域的なデザインの下で、各町村が固有の自然および有形・無形の文化遺産といった資源を開発することが重要だろう。実際、観光に取り組む民間部門の中には、もはや多額の補助金を注ぎ込んだ大型施設の建設や道路の拡張工事などハード面を整備して、全国何処にでもあるような無個性な観光地づくりを進めるよりも、多様なニーズを持った観光客に対応しながら、同時に地域の個性を活かしたツアーの企画など、ソフト面の充実の方が重要であると考える人々が出て来ている。例えば、東祖谷山村の商工会が平成14 [2002] 年4月にスタートさせた「奥祖谷めんめ塾」では、ソバ打ち、養蜂、炭焼き、伝統工芸品づくり、史跡めぐり、登山など、地域固有の自然や文化、または地場産業に根差した様々な体験企画を行っており、今後の展開が注目される¹⁸。

5. おわりに 一 町村合併の行方と地域振興

現在全国的に市町村合併の動きが活発化してきているが、この背景には、(1)行政圏と生活圏との大きなズレが生じて来ていること、(2)国、地方ともに深刻な財政危機下にある中で、効率的な財政運営が求められていること、(3)中央集権から地方分権へのシステム転換に伴ない、自治体自身の政策能力、経営能力を向上させるには、スケール・メリットを生む必要があること、という三つの大きな流れがあるという¹⁹。

確かに、三好郡西部地区の町村でも、例えば、山城町や西祖谷山村では購買層の大部分が、前述のように池田町などの外部に流出しており、また、山城町では近県に働きに行く者が多く、東祖谷山村では役場の職員の中でも、池田町や三加茂町から通勤して来る者がかなりいるなど、現在すでに商業圏、通勤圏などは広域化している。また、国の財政難に伴なって補助事業が年々減少するなど、この地域における財政状況は悪化して来ており、特に東祖谷山村においては、これまで雇用を支えてきた公共工事を従来通り続けて行くことはもはや不可能であることが自覚されて来ている。その上、平成12〔2000〕年4月の地方分権一括法の施行により機関委任事務制度が全廃され、国の地方への関与が縮小・廃止され、自治立法権が拡大される一方で、法定外普通税の許認可制廃止、法定外目的税の創設、個人市町村民税の制限税率の撤廃によって、自治体は歳入の自治までも要求されることになった²⁰。これによって、財政力指数が0.092~0.358と、多くを地方交付税など国の補助に負い、行政運営の上で国の指導下にあった三好郡西部4町村では、自主財源を増やす努力だけでなく、行政の効率化やサービスの多様化・高度化、職員の専門性の向上も強く求められている。

18 奥祖谷塾に関する情報は、<http://www.iya.jp/takumi/>。

19 佐々木信夫(2002年7月)『市町村合併』ちくま新書、pp.32-33。

20 佐々木信夫(2002年7月)『市町村合併』ちくま新書、pp.32-33。

そのような中で、徳島県三好郡では、平成14〔2002〕年2月27日に、全8町村の首長や助役、総務課長ら会員40人からなる合併問題研究会（会長 西徹 山城町長）が発足し、徳島県が示したこの地域における合併パターン（全8町村の合併案と、東部4町と西部4町村それぞれの合併案）について、それぞれのメリットとデメリットについて検討を行ってきた²¹。同研究会は、8町村の財政状況などの基礎データをまとめた合併問題報告書をまとめ、郡内各世帯へ研究会の広報紙「研究会だより」を数回にわたって配布して情報提供し、9月26日から10月10日にかけて郡内全世帯を対象にした住民アンケートを実施した²²。ただし、三好町は、それ以前に町議会が同様の趣旨の住民アンケート調査を行っていたことを理由に、郡全体のアンケート調査には参加しなかった²³。

そして、三好町を除く7町村の全世帯17,517戸の内、71.2%から回答があり、11月の集計結果によれば、合併を必要（アンケートの選択肢では、「必要」と「どちらかといえば必要」）と考える人が58.3%、必要ない（同じく「必要ない」と「どちらかといえば必要ない」）と考える人は37.6%だった。西祖谷山村だけは、「必要ない」（57.6%）が「必要」（37.5%）を上回り、村議会においても合併反対が大半を占めているという。さらに、合併が必要と答えた人に、合併の枠組みについて答えてもらったところ、「郡全体」を望ましいと考える人は54.5%で、「東部4町」を選んだ人は19.5%だった。池田町、山城町、東・西祖谷山村の西部4町村は過半数が郡全体の合併を望んでいるのに対して、東部地区の三野町、三加茂町は東部4町だけの合併を支持し、井川町では意見が分かれた。ただし、先に三好町議会が単独で行ったアンケートでも、合併を必要と考

21 徳島新聞、2002年2月28日付、<http://www.topics.or.jp/Tokushu/shichouson/>。

22 徳島新聞、2002年5月2日付；2002年8月11日付；2002年9月25日付、<http://www.topics.or.jp/Tokushu/shichouson/>。

23 徳島新聞、2002年5月14日付；2002年8月29日付；2002年9月25日付、<http://www.topics.or.jp/Tokushu/shichouson/>。

える人が62%、その内、東部4町のみでの合併を望む人が65%だったことを併せて考えると、東部地区では、東部4町のみでの合併を支持する声強いことが分かる²⁴。この結果を受けて、合併問題研究会は、「直ちに8町村の合併を進めるのは困難」との判断で一致し、8町村は当初予定していた、12月定例議会への法定合併協議会設置議案の提案を見送ることにした²⁵。

町村合併におけるこのような経緯が、これまで見てきたような三好郡西部4町村の観光振興の諸活動にどのような影響を及ぼすのか、現在のところはまだ分からない。もし東部地区の住民たちの大部分が望んでいるように、合併話が東部4町だけで進み、西部4町村が取り残されるようなことになれば、西部4町村だけで合併しても、それだけでは過疎の状況や脆弱な財政力に大きな変化はない、というよりも、過疎と財政悪化の進行は止まらないだろう。また、西祖谷山村を除く、西部地区の住民たちの大半は三好郡全体での合併を望んでいるが、それが達成された場合でも、山城町や東・西祖谷山村が新自治体の中心になることは考えにくく、これまでの市町村合併においても中心地区のみが栄え、周辺地区はますます衰退していったという報告は数多くある²⁶。しかも、これまで各町村が独自に進めてきた観光政策の中には、財政難を理由に中止されるものも出てくるだろう。そのため、西祖谷山村の住民や議会で「合併反対」が過半数を占めている現状は、村が進めてきた観光政策が成果を上げ始めた矢先の合併が、これまでの努力を無に帰してしまうのではないかという懸念も大きく影響していると思われる。

24 徳島新聞、2002年11月2日付、<http://www.topics.or.jp/Tokushu/shichouson/>。

25 徳島新聞、2002年11月19日付、<http://www.topics.or.jp/Tokushu/shichouson/>。

26 正木満之(2000年9月)「合併は旧住民になにをもたらしたか 仙台市に合併された泉市のその後」三橋良士明 編『ちょっと待て市町村合併』自治体研究社 pp.41-44;pp.49-54 : 山西善子「合併時の約束は反故に あきる野市の合併を検証して」三橋良士明 編、同書、pp16-29。

これらの西部4町村にとって、三好郡全体での合併が行われようと、東部地区から取り残されようと、今後、この西部地区で大型施設の建設や道路整備を進めて行くための財政的余地はあまりなく、これまでのような公共工事に大きく依存した財政運営を続けてゆくことは、もはや不可能だろう。それよりも、三好郡全体が合併した場合、その新庁舎は、山城町や東・西祖谷山村からかなり離れた場所に建設されることが予想され、事前にしっかりと市町村建設計画を作成しておかなければ、ますます過疎化が進行していくだろう。そのため、合併問題が今後どのような方向に進んでゆくにせよ、西部4町村の行政や民間の人々は、知恵を絞って若者の定住を促し、観光客をも惹き付けるような魅力ある地域づくりに取り組んで行かなければならないだろう。

(付記) 本稿の校正中、西祖谷山村が合併問題研究会から正式に離脱を表明し、東部4町だけで法定合併協議会設置に向けての準備会を発足させたため、西祖谷山村を除く三好郡7町村での合併実現の可能性はきわめて小さくなった。(徳島新聞、2003年1月14日付；2003年2月6日付、<http://www.topics.or.jp/Tokushu/shichoson/>)。

[謝辞] この研究のもととなった調査は、2001年11月、2002年2月および8月のごく限られた時間の中で行われたが、各町村役場の方々を始めとする地域の皆さんの御協力によって可能となった。中でも、徳島県商工労働部産業振興課課長の熊谷幸三さんや、同県池田農林事務所林務課主査兼林業推進係長の高橋幸次さんには、自ら車で現地を案内して頂き、多くの方々に御紹介頂いた上に、調査期間中、つねに適切な御指導を賜り、様々な示唆やアドバイスを頂いた。ここに特に記して深く感謝したい。